

TADESKA 報告要旨

日時：2013年11月2日（土） 14:00 - 16:00

場所：関西外国語大学中宮キャンパス

インターナショナル・コミュニケーション・センター（ICG）2階 6212教室

テーマ：「所要時間20分の教案を作る-点過去規則型の活用習得」

動詞活用の定着が甘くてスペイン語の習得が伸び悩む学生がいます。この現実を踏まえて、直説法現在形のみでの活用習得を修了した初心者にも20分でいかに正確に点過去規則型を習得させるか、を皆さんと考えてみたいと思います。各々の試行錯誤を持ち寄り、一工夫する場となるよう、皆さんの教材・方法をお持ちください。

* Tema: Elaboración de unidades didácticas de aproximadamente

20 minutos – aprendizaje de la conjugación de verbos regulares: pretérito indefinido

担当者：長瀬由美

使用言語：日本語

参加者：5名

0. テーマ選択の理由

初心者のスペイン語の学習が軌道に乗らない理由の第一は動詞活用の定着が徹底していないことに帰着するとも言えるかもしれない。

現在形の活用習得を乗り越えても、点過去規則型のそれで篩にかけられる学生が発生する。教える（習得させるべき）内容は明白だが、この現実を踏まえた、その習得の徹底のさせ方については教師の腕一つにかかっていると言える。

スペイン語初修者にとって直説法点過去規則型の活用を習得できるか否かは、スペイン語基礎文法習得ひいてはスペイン語音声習得の成否の鍵を担っていると言って過言ではない。おっかなびっくりの直説法現在形の次に習う、この活用形は現在形の習得時に身につけたハウツーが通用せず、現在形に引きずられた誤ったアクセントや、筆記すると正しいのに発音すると誤っているという、表記と発音の不一致が生まれてしまう学生が多々見受けられる。日本人の学生が犯す誤りの傾向を示し、これを最初から生まないようにする実践上の方法を考えてみる。

1. 教室での現状と問題の所在

クラス全体の合唱で 20 回ほど点過去で規則活用の各動詞の活用を繰り返すだろうか。表記は正しいのに、何度矯正しても 2 人称複数形の活用形の口頭でのアクセントを *hablastéis あるいは comistéis あるいは *vivistéis と一度も教えたことがないアクセントで定着させてしまう学生が、例年のことではあるのだが、生まれる¹。この種の誤りの芽を早期に摘まない場合、ペアワークする友達や近くの席の学習者に感染拡大しかねない危険がある。教えていない音声を学生が身に着けて来るといふ、毎年この不可解な現象を今年こそ一発で一網打尽にするべく頭を捻っていた。

今回のワークショップの参加者である先生方の担当学生達に見受けられる誤りはどのようなものかと尋ねてみると皆、アクセントに絞った表記と発音の不一致という点では上で述べた活用語尾が ar の動詞で言えば 2 人称複数形の活用形 hablasteis のところが *hablastéis になる点を特によくある誤りとして認識しているという。

学生の言い分を整理すると、スペイン語の動詞を初めて習う際には現在形から入るのが通常だが、一般的に日本人大学生にとっての第一外国語である英語の習得時と比べて数段難度が上がった感を受ける、スペイン語の動詞活用とそのアクセントの刷り込みが強烈であるため、通常二つ目の時制として習う点過去の活用形にも現在形のアクセントを持ち込むのだと要約できる。今回取り上げるエラーは、動詞語尾が ar であろうと er であろうと ir であろうとその動詞の点過去形 2 人称複数形の活用形になぜか「er で終わる動詞の現在形 2 人称複数形の活用語尾」が合体した形に強勢を置いて発音するという、既得の記憶に無理やり結び付けて実際の表記を無視した、明らかな確認不足のグループと、音程の上下の識別と再生に困難があるグループとでみられる。

今回のテーマ「直説法現在形のみ活用習得を修了した初心者に 20 分でいかに正確に点過去規則型を習得させるか」について考えている折、表記と発音における誤りの関係を見ておく必要を感じていた筆者は担当の 1 年生 1 クラス、2 年生 3 クラスに点過去規則型の筆記テストを課した。報告書という性格のこの文書の目的から離れるため、詳細はまたの機会に譲るが、その分析結果から今回問題にしているエラーは文法の定着度が高くても現れるものであるということが見て取れた。この理由は何か、この現象をどのように判断すべきかなどについての議論はまたの機会を待ちたいが、結論として、初心者なら誰にでも現れうるエラーなのなら 20 分と言わず一撃で、誤り様のない記憶として点過去規則型の活用を焼き付けてくれる、文法の定着度などに左右されない方法を発案する必要があることに気付いた。

2. アクセント習得の道

¹ 2013 年度は *hablarón, *comieron, *vivieron という新しいタイプの発音上の誤りが 1 年生の担当クラスに流布した。筆者の推論であるが、現在形とは違う、点過去形の活用語尾の -ron に注意を払わせようとそこに強勢を置いた発音を何度もして見せた教員が誰かの模範をそのまま鵜呑みにしたと思われる。問いたしたが、アクセント記号を見れば発音が誤っているのは彼らにも一目瞭然であるにも関わらず、そのアクセントを始めた理由は判然とはせず、ただ周りの仲間がやっているから自分のもそれに合わせたのだと筆者には理解された。

語学における発音というのは、音符を瞬時に読んで、調音して発声するのと同じ原理を持っていると言えるかもしれない。読み取った情報を運動に置き換えるのである。Aの暗号システムをBの暗号システムに置き換えるといえる、楽譜を読んで楽器で1鍵1鍵メロディーに移し替えるのより高度かもしれない。なぜなら自身が出す声の調音の高低への感覚・意識がある程度、訓練されている必要があるからである。

この分析に至るまでは視覚と聴覚の両方から正しいアクセントに導く方法を考えていた。楽譜にして聴きながら視覚的に上げ下げを認識させる方法である。しかし、これはそもそも（アクセント）符号が付いた情報を視覚的に読めてもそれを自身の声帯の動きに置き換えられない学習者には意味を成さないことに気が付いた。さてどうするか。

日本人大学生の誰もが呼吸するように意識もしないで出来ることに関連付けなければいけない。。。そうか、日本語の話言葉の語呂とアクセントに合わせればいいのだ！さらに勤務大学の立地条件を鑑みて大阪弁が適している。しかし、筆者は中国地方の出身で、大阪弁は初心者域を出ない（と思われる）。さらには専門分野は言語学や音声学などはかけ離れている。とはいえ、大学教員として言語教育に語呂合わせを用いるなど、真剣さを欠いた邪道のように思えるし、思われる危険がある。悩んだ。。。

しかし、意を決して当日、参加者らがあつと驚くなか、「“comer（食べる）”の点過去の活用形におけるアクセントおよびリズム習得のための語呂合わせ」を発表した。

「和美、ゴミ捨てをお兄ちゃんに任せるように言ったでしょ」の内容を「筆者による大阪弁」で comer の点過去の活用に語呂合わせした。たとえば comí は和美、comió はゴミ用^{よう}などである。

さらに音の高低の識別・再生に困難がある学生のために、これに音も振り、表記した。すべて「タ」などの単音では、指導者の先導で鼻歌のようにメロディー・リズム習得には漕ぎ着けても高低が意識出来ているとは限らない。よって視覚的にも識別できるように2音（2文字）にした。これも comí はドミ、comió はドドミなどである。また、「ミ」と高くなる音では「ド」の音の時に比べて、体ごと持ち上げるようにする、顎をしゃくるなどの「運動に置き換える」方法も足してやると、声帯を操作する発音だけに依存するよりも効果的であることを付け加えた。

語呂合わせは、スペイン語と日本語に共通する音声上の特徴があることを言葉遊びによっておもしろく気付かせ、スペイン語習得をより身近にするのに利用できると考えられる。この意味で、関西弁ネイティブでもなく、音声学も専門としない筆者が提案した、このアクセント修正案はあくまでもその習得の方向性を示し、導かんとするものであることを言明しておく。落ちこぼれが出やすいスペイン語の動詞活用習得中、間違ったアクセントの習慣を正攻法で言い直させても治らないと放置に至るのではなく、リフレッシュの意味を込めて「先生の変な大阪弁」という笑いで一旦砕いて、ア

アクセントそのものに注意を惹き、正しいアクセントに気付かせ、「彼ら自身にも」語呂合わせを提案させて、正しいアクセントを主体的そして意識的に反復練習するように導くのが狙いである。教師のもう一つの基本的役割である「正しい情報を提供する」ことは、まずは点過去の活用を模範的な滑舌で流暢に繰り返し、適切な例文に用いられた複数の使用例を適切な発音で何度も聞かせる（ネイティブによる視聴覚教材使用も含む）、学生による発音や提案された語呂合わせの是非の判定を正しく行う、などで果たされると信じる。

他にも、ar 動詞の基本として一般的に示されることの多い hablar（話す）点過去形の語呂合わせや、comer（食べる）の現在形のアクセントをドとミとの2音表示にする応用も示した。

筆者の発表が終わると、参加者の先生方も実に活発に、ご自分が授業で使用されている様々な活用習得法を示してくださり、大変有意義な時間が持てた。

3. まとめ

「皆で活用を合唱しているときが一番楽しかった」と学生が学期末にコメントをするのを何度も聞いた。意味のある発話はまだまだ出来なくても、習得中の外国語を自らの口で奏でて流暢に喋っている気になれる一瞬なのかもしれない。それなら尚更正しいものを、と思う。残念ながら、6つの人称の活用が流暢に言えても、スペイン語会話中にそのひと塊を使うことなどないが、初心者がスペイン語のリズムと抑揚を身に着けるには大事な基本訓練だと感じている。後日、さっそく授業で紹介しましたなど、嬉しい報告をくださる先生もいらっしやった。

1年生の自らの担当クラスで紹介したところ、学生たちはクスクス笑いあった後、神妙な顔でメモを取っていたが、口ずさむところを見たのはその授業中だけであった。が、学生達にはその後も即時矯正を怠らなかつたせい、または語呂合わせを紹介したことで点過去2人称複数の正しいアクセントに気付くことが出来るようになったからか、学年末にはこの学生らの口から誤った発音を聞くことはなくなっていた。教員の熱意は色々な形で学生に伝わるのかもしれない。